

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十)

津 守 真

子どもが負っている精神的課題が、遊びの中で生きられていることに、かなり明瞭に気付かされるときがある。子どもの遊びには、それはいつでも伴っていることであろうが、おとなにとっては、日々の現実のかけにかくれて、いつでも明瞭に気付かれる状態にあるとは言えない。子どもの側から言っても、ある精神的課題を乗り越えるには経過が必要であって、変化の時には、それが見え易い形をとって外にあらわれるのであると思う。この両者の機会が合したときに、遊びの中であらわれている、子どもの精

神的課題が、とくに明瞭に、われわれに認識されるのであろう。次に述べるのは、私が愛育研究所の知恵遅れの幼児の保育で体験した一月の保育の例である。まず最初に、この日の保育の記録を掲げる。

○

一月九日

朝、子どもたちが来るまで、時間的にも、空間的にも、間があった。私はしばらく何もしないでいた。(子どもたちのくるのを待つ間を、ゆっくりと過したいと思った。これから、何かが起ることを予期しながら、何が起っても受けとめられるように、心をととのえる間である)それから、私は一番目立たないあり方を考えて、部屋の隅の机で、はさみやクレヨンを使いはじめた。少しずつ、子どもが登園してきた。

まもなく、男児Tが来た。三学期の最初の日なので、新しいレールがあるのを見つけ、自分でとり出してつなぎはじめた。次々に長くつなげる。その上を、電池の電車を三台つなげて走らせる。またレールを長くする。かなりの時間をかけて、目に見えて長くなってゆく。

そこにYとRがくる。レールと汽車をじっと見て、近寄って、見ている。電池の電車がレールから外ずれると、Yは手を出して、電車をレールの上にのせようとする。すると、Tが走ってきて、その電車を持ってゆく。Yは、それに特別の反応もせず、見つづける。また、電車がはずれて手を出し、Tが立上ってきそうになると、電車をTの方に持ってゆき、床におく。数度、そういうことをくり返す。(私は、このことを感心して見た。Yは、明らかに、Tに合わせた行動をしている。Yは、行動でTにこたえている)Y、R、Tが三人、頭をつき合わせて、同じ所をのぞきこんでいる場面もあった。

こうして一時間近くすぎたころ、他の子どもが投げたボールがレールにあたり、長くつながってのびていたレールの一部分がこわれた。Tは、ギャーと言って、レールをけとばして庭に出ていった。そのあと、Yはひとりで、ゆっくりとレールをしていた。そのうちに私気がつくくと、Yは蛇腹トンネル(伸縮して伸びる室内用トンネル)をひきずってきて、その中に入り、反対側から出てくる。私が反対側の出口からのぞきこむと、ニコと笑う。何度も蛇腹トンネルの中をぬけることをくり返す。

Yはそれから、モザイクを両手にかかえて、蛇腹トンネルの中に持ちこみ、その中から、一個ずつ、外に向って投げる。全部投げ終ると、また両手にもてるだけ持って、蛇腹トンネルの中に持ちこみ、外に投げる。そのうちに、数個を手に握って投げる。蛇腹の中のモザイクを全部投げ終ると、また、持てるだけに持ちこんで、外に向って投げる。何度も、何度もくりかえした。そのうちに、自分からやめて、庭に出ていった。

庭では、Tがホースから水を出して、水路を長くつくり、水を流して、横の溝に流していた。Yはそこにゆき、砂を手にとつて、水路に投げる。すると、Tは急いでそこに走ってゆき、その砂をとりのける。Yはまた、砂を水路に向って放り投げる。Tは急いで、その砂をとりのける。何度もくり返す。

道をつくること

ここで、Tは、道をつくることに関心を向けていると私は思

う。レールを長くつなげてゆくのは、その上を走る電車の通る道を作っていると考えられる。レール遊びにも、いろいろの場合があるが、この日のTのレール遊びは、長く道をつくってゆくイメージが主になっていると言つてよいと思う。また、庭で水路をつくり水を流すのも、水の流れる道を長くつくるイメージが主になっている。この日のTは、この二つの遊びに熱中しており、この二つの作業でほとんど一日を過している。そして、だれかが、その道を途中でこわしたり、邪魔をしたりすると、すぐにそれをとりのけて、通れる道を作る。

Tのことについては、丁度一年前に、私のこのシリーズで記したことがある。そのころ、Tは水道の流しの水の刷け口から暗い奥をのぞきこむことに熱中していた。その後、二学期から、普通の幼稚園にゆくことができるようになり、幼稚園では、皆と一緒に何かをやるような努力を、本人自身がしているように見受けられる。いま、三学期になって、この子どもは、遊びの中で、道をつくることに熱中している。方向をもった道を見出すことは、この子ども自身が、いま取組んでいる精神的課題なのではないだろうか。そして、それが、遊びの具体的な形であらわれていると考えてよいだろうと思う。

私共は、その遊びにふれてとらえたものを、ことばや文字で表

現する。「レールを長くする」と言い、また、「水を流して水路をつくる」という。日本語で、「長し」は、ナガレ（流れ）と同根であり、ナガは、線条的に伸びてゆくさまを言う。（大野晋 岩波古語辞典）水を長くするのが、水を流すことであり、長くのびてゆくのが流れであって、この両者は一般に同じイメージでとらえてよい。

また、「道」については、ミは神のものにつく接頭語であり、チは方向を指すという。古代においては、人の通路に当る所には、それを領有する神や主がいると考えられたので、ミコシヂ（み越路）、ミサカ（み坂）、みさき（み崎、岬）など、みを冠する語が多く、ミチもその類である。転じて、人の進むべき正しい行路、修業の道程などの意に展開し、また、人の往來の性から、世間の慣習、交際などの意に用いられた。（大野晋 岩波古語辞典）いま、この子どもが道をつくることに関心を持ったということは、自分の進むべき方向に関心をもちはじめたと言えよう。

この子どもは、自分の世界の中で自分の歩むべき道を見出す努力をはじめている。四月になって、この子どもは、小学校の普通学級に進むことに、教育相談関係者も、幼稚園も、私共も同意した。新たな課題が次々に出てくるであろうが、この日の保育には、生活全体が上昇しつつある時期の遊びのひとこまが、あらわ

れていると言えよう。

手放すこと

Yは、モザイクを両手に持って、蛇腹の中にはいり、一個ずつ外に向って投げることを反復した。Yはこの動作を真剣にやっていた。それはだれかに向って投げるのではなく、蛇腹の中から外に向って投げる動作であって、外に向って手放すと言った方が適切であるように私には思えた。

このような動作を熱心にくり返すのを見てみると、Yにとっては、物を手から放すということが、特別な精神的意味をもつているように思えてくる。Yにとっては、手から放すということは、とても大変な課題であり、このような具体的な遊びの形で、その課題に取組んでいるのではないかと思う。

それは、この日の遊びに、ゆっくりとふれたならば、だれにも恐らく察せられることであろうと思うが、もう少し説明を加えると、この行動の意味が一層明瞭になると思うので、少しだけ情報を追加することにする。

Yは、この一年以上、ひどい便秘に悩んでいた。子どもにとっても、母親にとっても、それは悩ましいことであつたようで、ひどいときには、子どもは一日中遊ぶこともしないいでうろうろし、母親も便秘が氣になつて何も手につかないくらいであつた。この子どもが、このような遊びをしたことを考えると、この遊びの持つ意味が一層はつきりしてくるであらう。

Yは自分で蛇腹をひきずつてきて、その中にもぐりこみ、自分で身をくねらせて出て来たときに、大声で笑つた。これは直腸の中から、自分が大便になつて出てきたかのようなのである。蛇腹の中から、モザイクを外に向つて手放すことを反復するとき、いかにしたら、手の中にある物を、外に向つて手放すことができるかを試みているかのようなのである。Yにとっては、大便であれ、手の中にある物であれ、一度自分のものとしたものを、手放すことが大変むづかしく、そのような精神的課題と取り組んで格闘していたのではないかと思う。

便秘というような生理的なできごとを、精神的課題と結びつけて考えるのは、考えすぎであり、こじつけではないかという考えもある。しかし、私は、子どもの場合にはとくに、生理的、身体的なことが精神的なことと深く結びついているのだと思う。

排泄や食事は、子どもにとつて、楽しみの時や不安の時となつ

ており、排泄や食事のことで問題がこじれると、精神生活全般にわたつて、影響も大きい。子どもは、生理的、身体的存在である点では、動物と共通であり、それを前提とし、その中から、精神的存在としての人間が生れてくる。

排泄や食事は、生理的、身体的領域に限られるのではなく、それは同時に、精神的なものをふくんでおり、そこをとばして、高尚な精神的存在としての人間は考えられないのではないかと思う。このことだけを考えても、排泄や食事は、機械的に条件づけ、画的にしつけうるものではなく、人間的な心の接触をしなから、きわめて人間的になしてゆくことを必要とすることがあらう。

排泄のことを通して、子どもは、保持すること、手放すこととの兩極の行為を相互に調節することを学んでいるというのは、精神分析学が提出した考え方である。それが親子関係や、その他のいろいろの事情でうまくいかないとき、手放すことが困難になつたり(便秘)、保持することが困難になつたり(下痢)する。

それは生理的症狀を呈するだけでなく、精神的に何かを手放すことがむづかしくなつたり(一度獲得した物を手放すことができなないなど)、逆に、同じ物を保持しつづけることがむづかしくなつたりする。あるいは、排泄のことにいつまでも固執して、そこか

ら脱することができず、極度の清潔癖が生じたりする。このことは、原因—結果論の中で考えるのではなく、身体的なできごとにも精神的側面があり、精神的できごとにも、身体的側面があるのが、人間の現象であることを考えるときに、納得できる考え方であると思う。

便秘に悩んでいたYが、物を手から放す遊びに没頭しているのは、まだ彼が解決していない、保持したものを手放すという、彼自身の精神的課題と取組んでいると言えるだろう。Yはいまこの遊びと遊ぶことによって、手放すこつ、を学びつつある。実際、便秘もこの頃から解決し始めたのも事実であるが、それ以上に、排泄の領域で混乱した彼の精神的課題を、自分で取扱うこつ、を学んでいる点に、この遊びの意味がある。

この子どもの問題は決してこれで解決したわけではない。まだ他の問題もある。また、このような精神的傾向は、これから先も、くりかえし、いろいろの形をとってあらわれるだろうと思う。けれども、それぞれの段階で、自分の負っている精神的課題と取組んで、それを扱うこつ、を会得すること、また、そのために、まわりのおとなが協力することが必要である。それによって、子どもは、自律的人格として成熟してゆくのであると思う。

一日の保育の中で見られた二人の子どもの遊びに着目して述べた。いずれも、私が二年以上にわたって、定期的につきあっていた子どもたちである。この子どもたちのことについて述べようとするなら、この一日だけのことだけでは不十分であり、その経過など、もっと詳細に述べなければならぬし、その他の側面にもふれなければならない。しかし、いまここでは、それを論じてゆくの目的ではない。むしろ、一日の保育に重点をおいて考えようとしたつもりである。

一日の保育であっても、継続的に子どもにかかわっている者にとっては、それまでの体験の積み重ねの上に、一日の保育がある。それでは、過去の体験から割り出した仮説にもとづいて、次の一日の保育がなされるのであろうか。私は、それは疑わしく思う。ある子どもについて、いろいろの現象から考えることは、それにもとづいて次の手順を設定するような仮説を立てるためではないと思う。もしもそうであったなら、次の一日の保育は、仮説

の枠組の中に縛られた一日になってしまふ。その子どもとの過去の体験は、新たな現象を加えて、その全体を考え直すときの素材となることはたしかなことであるが、新たな現象を、意識的に束縛する資格はない。

一日の保育は、そのときに子どもの中に動いているイメージを感じとり、それにもとづいて行なわれるものである。あるとき

は、子どもと共に、その遊びをたのしみ、あるときは、そのときに子どもが真剣にとりくんでいる精神的課題に共感して、傍にいらる。その日に、新たに、子どもの中の起っていること、保育者は、できる限り敏感になることをつとめるのである。

(つづく)

